

「日本語日本文学論叢」第十七号 抜刷
令和四年二月十二日 発行

長尾雨山 青壮年期の漢詩文学作品―初歩的考察

柴田清継

長尾雨山 青壯年期の漢詩文作品―初歩的考察

柴 田 清 継

【前言】 本稿発表に至るまでの経緯について説明させていただきたい。―筆者は、二〇一九年五月発行の中華詩詞研究院・復旦大学中文系編『中華詩詞研究』第五輯に「日本漢学家長尾雨山の詩論与詩作――以青壯年時期为中心」と題する拙文（中文）を掲載していただいた。次に、これを日本語で書き直し、国内の読者向けに改編した「長尾雨山青壯年期の詩論と詩作―初歩的考察―」と題する拙文を二〇一九年中に作成した。その前半部分（内容上の境目よりも、分量上の均等という観点から分割された前半部分）を「(1)」として、二〇二〇年十月発行の『書論』第四十六号に掲載していただいた。その後、本来なら、二〇二一年の夏か秋に発行される『書論』の次号に後半部分が「(2)」として掲載していただけるはずだったが、現在、ある事情により『書論』の次号が刊行される見通しが立っていない。そのため、拙文の発表が中途半端な状態とどまり、宙に浮いた状態になっている。

筆者としては、「(2)」の部分をしてできるだけ早く公開したいので、本誌に掲載していただくことにしたのだが、その場合、処理しておかねばならないことが二点ある。一つは、筆者の論述は、分量上は、ほぼ詩論が二、詩作が五くらい比率だったため、均分して掲載していただいた『書論』第四十六号の「(1)」が、詩作に関する論述の初めの部分まで食い込み、中途半端な箇所が終わっているため、その切れ目より後の部分を別の学術雑誌にそのまま発表しても、読者には理解していただきにくいということがある。そして、もう一つは、何よりも、「(1)」が掲載されていない雑誌上で「(2)」と題する不自然さである。そこで、本誌では、既発表の部分と一部重複することになるが、詩作に関する論述の部分全体を発表することにしたい。なお、些細な

事かもしれないが、詩作の部分だけということになると、「詩論と詩作」というセット名称よりも、「漢詩作品」とした方が分かりやすいだろうし、実際は「文」にも少しだけ言及するので、標記の論題にした。

また、中文稿執筆後の時間の経過とともに、いくつかの気づきが生まれ、多少の再調査や再考も行ったため、行論を若干改め、加筆訂正をし、そうした修正は『書論』第四十六号掲載の「(1)」との重複部分にも及んでいることをお断りしておく。

はじめに

長尾横太郎（一八六四～一九四二）は、字は子生、号は雨山、明治から昭和前期にかけて活躍した書画家であり、漢詩文作家である。筆者は、上述の通り、前稿「長尾雨山青壮年期の詩論と詩作―初歩的考察―(1)」において主として彼が青壮年期に上梓した中国古代詩歌に関する長篇、及び短篇の評論を取り上げ、当時の漢詩文作者にあまり類例のない、これらの評論の内容を簡略に紹介しつつ、彼の当時の詩歌理想論を抽出してみたのであるが、本稿では同時期の彼の漢詩文、特に漢詩作品を取り上げ、どのような作風であったか、彼が評論で唱えた詩歌理想論とどのような関係にあるかといった点を考察してみたい。

では、雨山の青壮年期とは、いつ頃のことなのかということになるが、この点については少なくとも彼の一生の前半期を見渡しておく必要がある。讃岐高松で生まれた彼は、明治十七年（以下、「明治」は必要のない限り、省略する）に上京し、まず東京大学の古典講習科に入る準備をした（二十歳）。十八年二月、東京大学古典講習科に入学し（二十一歳）、二十一年七月に卒業した（二十四歳）。その年の九月、学習院に勤務、十二月に文部省に入った。二十二年二月、東京美術学校が創設されると、その教授も兼ねた（二十五歳）^(注)が、二十四年三月には文部省と美術学校を同時に退いた（二十七歳）。その後も東京に止まり、各種の学校の嘱託として勤務していたようであるが、三十年に熊本の第五高等学校の教授として赴任し（三十三歳）、三十二年には東京高等師範学校の教授として東京に戻って来た（三十五歳）。その後、三十五年に教科書疑獄事件に巻き込まれて退職し（三十七

歳)、中国に渡って上海商務印書館の編集顧問を務めて、大正三年に帰国した(五十歳)。以下は省略するが、筆者は十七年の上京から三十五年の中国渡航前までを彼の青壮年期と位置付けている。

筆者がこれまでに雨山の漢詩文作品を収集・読解するプロセスで得た大体の印象を言えば、中国渡航後、特に帰国後は交往詩や序跋等の占める割合が多くなるのに対し、青壮年期の作品には、交往詩などもありはするものの、一方、かなり激しい思想・感情等の詠み込まれている作品が一定数あって、その点が他の作者たちと比べて、かなり際立っていると言える。本稿で特に取り上げようと思う所以である。

ただ、作品の紹介に取り掛かる前に、資料の問題を検討しておかなければならない。

一、資料について

雨山は生前、漢詩文、和文による評論・講演等、数多くの著作を残してきたが、単行本として刊行されているのは、長男の長尾正和が編集した雨山の書画に関する講演集である『中国書画話』^(註2)だけである。ところが、これとは別に、京都国立博物館が雨山の遺族から譲り受けた、いわゆる「長尾雨山関係資料」というものがあるので、これについて述べておこう。

この資料については、二〇一五年から二〇一七年にかけて、当時同博物館主任研究員だった呉孟晋氏を研究代表者として研究が進められ、二〇一八年にその研究報告書が^(註3)刊行された。報告書巻頭の呉氏執筆「長尾雨山関係資料」と題する一文によれば、同資料には、書簡・文房具・書籍・写真・書類などのほかに、詩文章稿千点超が含まれており、その詩文章稿には、「何遠楼底稿」「石隱室題跋」などと題された詩文や題跋の草稿のほか、記念碑の碑文や画集の序文、書画の箱書きなど様々な零葉が混じっているという。

この報告書の中心をなすのは呉氏がまとめられた「長尾雨山関係資料目録」(全一七四頁)であるが、その中で、「E草稿」

と分類・命名されたもののうちの「草稿（ホ）」「先君遺墨」（詩稿冊）箱14」と称されているものが、雨山の詩歌を研究しようとする者にとっては、最も緊要な資料ということになる。詩稿は明治二十四年から昭和十二年までの作品が二十二冊にまとめ整理されている。第一冊（何遠楼詩稿 辛卯至己亥）は明治二十四年から同三十二年までの九年分、第二冊（何遠楼詩稿 庚子至癸卯）は明治三十三年から同三十六年までの四年分だが、それ以下はほぼ一冊で一年分となっている。この「草稿（ホ）」「先君遺墨」（詩稿冊）箱14」の部分に列記された作品数を数えてみると、約八七〇篇であるが、草稿の中にはほかにも明らかに詩歌作品と見なされるものが相当数存在し、重複があろうけれども、他に数百篇は存在するようである。

さて、「長尾雨山関係資料」にこれほど多くの詩歌作品が含まれているのであれば、それらに目を通すことなく雨山の詩歌について論ずることの意味が問われることになる。ただ、いまだ資料が公開される段階には至っていないようなので、筆者は敢えて筆者自身が独自に集めてきた作品を資料として、彼の詩作と他者からの評価について考察してみることにした。「長尾雨山関係資料」公開までの橋渡し、あるいは公開後、本格的な研究が始められる際の一つのたたき台にでもなればという気持ちからである。

筆者が収集してきた雨山の青壮年期の作品は、そのほとんどが当時の新聞や雑誌の漢詩文欄に掲載されたものであるが、それらは彼が自ら積極的に投稿し、選者が評価したから掲載されたわけであって、基本的にすべて自他ともに認めた彼の代表的な作品と見なすことができるのではないだろうか。その意味でも、本稿の考察は全く無意味というわけでもないと言えるだろう。なお、以下、年次を記す際、自明なものについては「明治」の年号を省略する。

二、高松での少年期の作品

この時期の作品として、筆者は四篇を得ているが、一篇だけ紹介しておこう。いずれも雨山の師、片山冲堂（一八一六―

一八八八）が評者を務めていた『屋山旭影』^(注)に載っている。同誌第二十七号（十六年四月三十日）所載の作を挙げよう。

桃源春曉

仙源窮処洞門通

仙源 窮まる処 洞門 通じ

萬樹夭桃帶露紅

萬樹の夭桃 露を帯びて紅なり

頼有催租人未到

頼いに租を催す人の未だ到らざる有り

夢酣花影鳥声中

夢 酣なり 花影鳥声中

課題詩であろうと思われる。十九歳の時の作である。

三、明治十七年の上京後、二十三年頃までの作品

上述の通り、雨山は十七年に上京し、東京大学での学業、その後の就職を経て、二十四年春にフリーとなったが、この時期の作品を筆者はいくつか収録している。東大在学中の作品と見られるもののうち、最も特徴的だと感じられるのは、次の作品である。

秋夜有感

回首家山千里程

首を家山に回らせば 千里の程

西風落木旅魂驚

西風 落木 旅魂 驚く

三秋客思多帰思 三秋の客思は 帰思 多く

四壁虫声似雨声 四壁の虫声は 雨声に似たり

詩自窮時漸得趣 詩は窮する時より漸く趣を得

愁於深処似無情 愁いは深き処に於いては情無きに似たり

蕭条独夜眠難就 蕭条たる独夜 眠り就り難し

照枕寒燈滅復明(注5) 枕を照らす寒燈 滅えて復た明らかなり

ここで詠出されている望郷の念は、この時期彼がよく表現した诗情の一つである。また、秋も彼が作詩において最も好む季節である。頸聯には分かりやすい技巧が用いられている。

東大在学中の作と見られる他の三篇は、司馬光の「破甕」の故事と新法・旧法の争いとを結びつけた頓智の作「温公破瓮図」(七絶)、張継の「楓橋夜泊」をひねった感のある「秋江夜泊」(七絶)及び「鎌倉道中」(五律)である。(注6)なお、『朝野新聞』二十二年一月二十九日に「円覚寺」と題する五律の詩が載っているが、これは「鎌倉道中」と同時の鎌倉旅行の際の作かもしれない。

長尾正和によると、東大卒業後の美術学校在職中、雨山は、美術学校で苦楽を共にしていた親友の岡倉天心(一八六三—一九二三)、及びその他数名の美術学校関係者と共に、二十二年夏、霞ヶ浦・大洗に遊び、その時の「大洗観濤」(七律)と題する雨山・天心の唱酬詩が残っている。『朝野新聞』二十二年八月十六日所載の「刀江行」(七言十二句)もその旅行の途中での作品かもしれない。正和によると、この頃か「あるいはこれから間もなくの頃か、二人で鎌倉方面へ遊んだようで、その時の唱酬詩も残されている」という(とすると、上述の「鎌倉道中」を詠んだ時とは別の旅ということになる)。そして、天心の公務出張を利用して、「二十三年一月一日から、二人は京都奈良へ旅行した。(注7)」

その他、「避俗竹深処」で始まる「雑詩二首之一」(五絶)、関ヶ原へ旅行に行つて詠んだと見られる「関原懷古」(七絶)(注8)、「清

明」(七絶)、「春興」(七律)、「題梅花」(七絶)などもある。『しがらみ草紙』第十二号(二十三年九月二十五日)に掲載された七律の三首連作「追憶旧游有感」は、それまでの月ヶ瀬(二十三年年初からの京都奈良旅行の際の訪問か)や利根川などへの旅を回顧して詠んだものである。その第三首を挙げよう。

追憶旧游有感其三

三過刀水詠長流 三たび刀水(利根川)を過りて長流を詠めば

満目蒼茫関八州 満目 蒼茫たり 関八州

鶴影掃霜横大野 鶴影は霜を掃いて大野に横たわり

濤声捲月撼危楼 濤声は月を捲いて危楼を撼かす

江山仍倚孤筇客 江山に 仍お倚る 孤筇の客(一人旅の旅人)

身世還添数首秋 身世 還お添えたり 数首の秋

千里計成天地窄 千里の計 成りて 天地 窄し

更宜何処試豪游 更に宜しく何れの処にか豪游を試みるべけん

四、鄭孝胥訪問と「詠懷」

明治に入ってから来日するようになった、詩文の教養を具えた中国の外交官や文人との交際を求める日本の漢詩文作者は、少なくなかったが、雨山もそのような中の一人だった。二十四年七月に、鄭孝胥(一八六〇〜一九三八)が駐日公使館随員として来日すると、そのころ各種学校の嘱託勤務で日々を過ごしていたと見られる雨山は彼のもとを訪れ、交流を始めている。

雨山が初めて鄭孝胥に会った二十四年十二月十二日のことが、鄭孝胥の日記に記されているので、紹介したい。

日人長尾楨太郎来謁、袖海為之介。其人号雨山、状頗寒素、以咏懐五詩為贄。与筆談、詞甚暢達、可比水野貫龍、過于西島也。又連出数詩、皆質美而无教。咏懐詩有曰（中略）、又曰（中略）、筆意俱好、可以造就、談加午乃去。（注10）（日人長尾楨太郎来謁す。袖海之が介を為す。其の人は雨山と号し、状頗る寒素なり。「咏懐」五詩を以て贄と為す。与に筆談するに、詞甚だ暢達す。水野貫龍に比す可く、西島に過ぎたり。又連けて数詩を出だすに、皆質美くして教ぶるもの無し。「咏懐」詩に曰う有り（中略）、又曰く（中略）、筆意俱に好く、以て造就す可し。談 午を加えて乃ち去る。）

「可以造就」、すなわち見込みのある人物だとの鄭孝胥の感想が、印象的である。雨山が手土産代わりに持参し、鄭孝胥に評された「咏懐」詩が、これより二年半後の二十六年六月二日の『東京日日新聞』文苑に掲載されているので、見てみることにしよう。

詠懐

①（注11）秋天何寥廓 秋天 何ぞ寥廓（広く果てしない）たる

上有玄鶴翔 上に玄鶴（黒い鶴）の翔る有り

清唳落九臯 清唳（清らかな鶴の鳴き声） 九臯に落ち

餘韻散八荒 餘韻 八荒に散ず

鷺雀亦何意 鷺雀（小人物の比喩） 亦 何をか意わん

飛鳴上枯楊（注12） 飛び鳴きて枯楊に上る

詹々彼小言

安得大雅揚

我独寤寐言

涕下沾衣裳

② 懷彼南方美

明發上崇樓

我欲往從之

褰衣聊夷猶

鳴雁自遠到

煙樹翳道周

伊余悵有感

萬里倚素秋

相思不相見

寥天一悠悠

③ 野鶴何昂々

難伍鷄群中

吞舟不棲河

枳棘鸞鳳空

昏旦槽檻食

詹々〔くどいさま〕たる彼の小言

安くんぞ大雅の揚がるを得ん

我 独り寤めんも寐ねんも言い

涕 下りて 衣裳を沾す

彼の南方の美を懐い

明あけがたに発して崇樓に上る

我 往きて之に従わんと欲するも

衣を褰かかげて聊か夷猶〔たちもとおる〕す

鳴雁 遠きより到るも

煙樹 道周〔路傍〕を翳おほう

伊余 悵われみて感いたえ有り

萬里 素秋〔秋〕に倚る

相思うも相見ず

寥天〔どこまでも広い天空〕 一に悠々たり

野鶴〔隱士の比喩〕 何ぞ昂々〔高潔〕として

鷄群の中に伍し難き

吞舟は河に棲まず

枳棘に鸞鳳空し

昏旦 槽檻の食

焉飽十里驄

焉くんぞ十里の驄を飽かしめん

燕臺市朽骨

燕臺 朽骨を市(注1)

知己欲何逢

知己 何くにか逢わんと欲する

浩浩丈夫志

浩浩たる丈夫の志は

莫与群小同

群小と同じくする莫し

④ 飯籬驅軀急

平生寡暇豫

飯籬〔飯かご〕 軀を駆ること急にして
平生 暇豫〔楽しむ暇〕 寡なし

兀傲不合世

兀傲として世に合わず

俗子謂吾倨

俗子は吾を倨れりと謂う

塌来有尚友

塌来〔近頃〕 尚友 有り

聊可祛煩慮

聊か煩慮を祛きる可し

枉屈匪我志

枉げ屈するは我が志に匪ず

忽々日月除

忽々として日月 除すく

幽人美貞吉

幽人〔隱士〕は貞吉を美するも

世道貴濶歩

世道は濶歩を貴ぶ

⑤ 聖人死既久

大盜曷不止

大盜 曷ぞ止ま(注15)ざる

老聃治術疎

老聃〔聃は老子の諡〕は治術に疎く

無為為天理

無為を天理と為す

金氣入秋肅 金氣 秋に入りて肅しく

猛鷗盤空至 猛鷗〔猛々しい鷲〕 空を盤りて至る

狡兔為所懼 狡兔〔はしこい兔〕も懼す所と為り

天地悲風起 天地に 悲風 起こる

蚩々彼羣小 蚩々〔愚か〕たる彼の羣小

屑々唯事利 屑々として 唯 利をのみ事とす

以是孟軻氏 是れを以て孟軻〔軻は孟子の名〕氏

発口説仁義 口を発けば仁義を説きぬ

利をのみ事とする小人がのさばる世の中。隠士ながらも吞舟の魚や鸞鳳たるプライドのある私は、自分を世の中に合わせる
ことができない。そのような私を、俗子は倨傲と称するが、私は己を曲げてまで知己が欲しいとは思わない。昔の賢人を友と
すれば煩慮を去ることができるのだ。……

この作品には、当時清国駐日公使館の参贊官を務めていた呂増祥（字秋樵。？～一九〇二）と、『東京日日新聞』文苑を主宰
していた森槐南（別号菊如澹人等。一八六三～一九一三）の批語が付せられている。後者を挙げることにしよう。

音古味旨、骨氣俱高、於替仲散、阮嗣宗間、別成一家。是陳伯玉之所欲力撫者。〔音古〔古風〕く味旨く、骨氣俱に高く、替仲散・
阮嗣宗の間に於いて、別に一家を成す。是れ陳伯玉の力めて撫わんと欲する所の者なり。〕

この評語は、〈雨山のこの作品の特色は魏の嵇康・阮籍に似通いつつも別に一家を成したもので、「感遇三十八首」を詠んだ

初唐の陳子昂が倣おうとした阮籍の「詠懷」詩の詩境に兩山なりに到達し得ている」といった意味に解してよいと思う。適確な批評と言えよう。

ついでながら、兩山は鄭孝胥と唱和した作品を古里の新聞『香川新報』に投稿している。それは、彼が二十五年の十二月二十七日、同郷の友人、牧野靜齋（一八六三〜一九三七）とともに鄭の宿舎を訪れた後、新橋の料亭で酒を酌み交わした時の唱和である。二十六年四月十三日と二十日の同紙「文苑」に、鄭の七律、これに次韻した兩山の「明治壬辰臘月念八日訪清国星使隨員鄭大夷（号蘇龕）僑居共飲於新橋湖月樓席上次韻賦贈」と題する作、及び同題の靜齋の作等が掲載されている。兩山の作の後に付された靜齋の次の識語により、当日の様子を窺うことができる。（注17）

此日、余亦同遊。酒間、各相約、刻一詩、賦律一首、詩不成者、罰依金谷酒數。蘇龕沈吟良久、乃書其旧作、見示。兩山即次之。此詩是也。亦吟壇快事哉。「此の日、余も亦同に遊ぶ。酒間、各おの相約すらく、一詩に刻り、律一首を賦せん、詩成らざる者は、罰金谷の酒數に依らんと。蘇龕沈吟すること良久しくして、乃ち其の旧作を書き、見示す。兩山即ち之に次す。此の詩是れなり。亦吟壇の快事なるかな。」

政治家であるとともに詩人としても著名だった鄭孝胥と交際し、詩の唱和までしたことは、兩山にとって相当に誇らしいことであつたのだろう、そのためわざわざ郷里の新聞に投稿したのであろうと推察される。（注18）

五、「詠懐」系統の作品

(1) 「貧士歌」

さて、二十六年に入ってから、雨山は右引の「詠懐」と同様の詩想やその延長線上にあるような作品を次々に発表するようになる。同年五月十二日の『東京日日新聞』文苑に掲載された「貧士歌」^(註19)を見てみよう。

貧士歌

商飈^(註20) 鬢^(註21) 至 商飈^(註20) 「秋風」 鬢^(註21) 鬢として至るも

我褐不及腰 我が褐は腰に及ばず

以何医調飢 何を以てか調飢^(註20)を医さん

葵藿日以彫 葵藿^(註22) 「君主・長上への忠誠心」 日に以て彫む

宵人駕軒路^(註23) 宵人^(註24) 「小人」 軒路に駕し

揚揚崇闈朝 揚揚として崇闈に朝す

雖有貧士歎 貧士の歎き有りと雖も

蘆中不可傲^(註25) 蘆中^(註26) 傲む可からず

昂然仰天歌 昂然として天を仰ぎて歌えば

歌声美於簫 歌声 簫よりも美し

自己の貧しさ、貧しさゆえに赤心もしぼんでゆく。権力を握る小人に対する憤り、一方、己が持する清らかな心。この作品

にも呂増祥と森槐南の批語が付されている。

呂…観化固窮、随境自得、皆元亮胸臆間語。(化を觀れば固より窮し、境に随えば自得す。皆元亮胸臆間の語なり。)

森…余不甚喜世之模擬剽窃、擗擗釘鉅、公然自命為擬古者、独於兩山詩、每擊節歎賞、諷誦弗能釈手。要以其有真氣骨真學問耳。嘗屢与青厓言之、青厓亦窃同余意。而近日憊廢、終致令偽明贗唐膚淺空疎之徒、闖其城壘、踞其牆壁、深自潜匿、陸梁跋扈、輕薄嗤点、甚則吹毛索瘢、毫無忌憚。余窃代為不平、適録兩山此章、乃書所見、以問于世。(余甚だしくは世の模擬剽窃、擗擗(引きはがし剝ぎ取る)釘鉅(寄せ集める)し、公然として自ら命じて擬古と為す者を喜ばざるも、独り兩山の詩に於いては、毎に節を撃ちて歎賞し、諷誦して手を釈つ能わず。要するに其の真の氣骨、真の學問有るを以てのみ。嘗て屢しば青厓と之を言えるに、青厓も亦窃かに余が意に同ず。而して近日は憊廢し、終に偽明贗唐、膚淺空疎の徒をして、其の城壘に闖み、其の牆壁に踞り、深く自ら潜匿し、陸梁跋扈し、輕薄嗤点(嘲りあら捜しをする)し、甚だしくは則ち毛を吹きて瘢を索め、毫も忌憚無からしむるに致る。余窃かに代わりに平らかならずと為す。適たま兩山の此の章を録して、乃ち所見を書し、以て世に問わん。)

呂評は、必ずしも作品の趣を正確にとらえてはいないように思われる。これに対し、森評は、当時の詩壇の兩山觀をも伝えてくれるもので、有益である。森評の要点の一つは(兩山の擬古の作は、当時の模倣や剽窃ばかりを事とした擬古の作と異なつて、本格的なものであり、それは兩山が真の「氣骨」と真の「學問」を具えているために可能となつた)ということ、もう一つは(唐・明の詩風のうわべだけを模倣する連中が、臆面もなく他人の作のあら捜しをしており、そうした風潮は残念だが、そのような無念を晴らすためにも兩山のこの作品は収載するに値する)ということである。「氣骨」は、「詠懷」詩に対する森評に見えた「骨氣」と同義であるに違いない。作品に勢いと力がある、今風に言えば、骨太で力強いということ、森槐南の兩山觀の

根底をなすものの一つのようである。なお、森に同意した青厓とは、国分青厓（二八五七～一九四四）であること、言うまでもない。

(2) 「消遣十首」

次に、二十七年八月に新聞『日本』^(注24)に連載された「消遣十首」^(注25)を見てみよう。

消遣十首

① 窮居幾何年 窮居すること幾何年ぞ

頗知寒与飢 頗る知る 寒さと飢えとを

神京駿髦会 神京（帝都）には 駿髦 会するも

貧儒疎時宜 貧儒は時宜に疎し

文章不直錢 文章は錢に直^あたらざるも

吟哦猶是為 吟哦 猶お是れを為す

斗米三旬食 斗米 三旬の食

食尽安求之 食らい尽くさば 安くにか之を求めん

向來門下客 向來 門下の客

望望路人姿 望望たり 路人の姿

世道由黄金 世道は黄金に由る

勿頸誰与期 勿頸 誰とか期せん

方悔出山拙

方^{はじめ}て山を出づる〔世に出て活動する〕の拙きを悔ゆるも

名利置身危

名利に身を置かば危うし

龍蛇困沙泥

龍蛇 沙泥に困しみ

徒為螻蟻噉

徒らに螻蟻の噉うところと為るのみ

②聖賢彼何者

聖賢 彼 何者ぞ

放言驚鬼神

放言 鬼神を驚かす

礼義施桎梏

礼義は 桎梏を施し

俾人亡性醇

人をして性の醇を亡わしむ

累累魯中叟

累累たり 魯中の叟〔孔子のこと〕

道窮泣獲麟

道 窮まり 泣きて獲麟〔擱筆〕す

膾肉輕去就

膾肉 去就を軽くし^(注26)

遠遊煩征輪

遠遊 征輪を煩わす

一生唯歎嗟

一生 唯 歎嗟するのみ

仲尼非達人

仲尼〔孔子の字〕は達人に非ず

碌碌我何為

碌碌として我 何をか為さん

独慙頭上巾

独り頭上(注27)の巾を慙ず

醉当浩然歌

酔わば当に浩然として歌うべし

天地氣象新

天地 氣象 新たなり

義皇距不遠

義皇〔伏羲のこと〕 距たること遠からず

暫得復天真 暫く天真を復するを得たり

③老聃矇事理 老聃は事理に矇く

有無失涯垠 有無を涯垠に失う

放縱一舜跖 放縱〔氣まま〕に舜跖〔聖人と悪人〕を一にせば

何以率黎民 何を以てか黎民を率いん

谷神竊難知 谷神〔宇宙の本体〕道は竊として知り難けれども

歴歴形骸陳 歴歴として 形骸 陳なる

萬物各流形 萬物 各おの形を流し

蒼蒼日以新 蒼蒼として日に以て新たなり

奚復辨其無 奚ぞ復た其の無を辨ぜん

茫茫身後身 茫茫たり 身後〔死後〕の身

彼亦不容世 彼も亦 世に容れられざらん

牢騷不平倫 牢騷たる不平の倫とらから

放言蔑天道 放言 天道を蔑しなみ

空論欺愚人 空論 愚人を欺く

胡不飲醇酒 胡ぞ醇酒を飲み

陶然復爾真 陶然として爾が真を復せざる

玉壺寬乾坤 玉壺は乾坤を寬くし

醉中無富貴 醉中に富貴無し

④昔慕春申君

昔 慕いき 春申君の

豪奢天下驚

豪奢に 天下 驚き

珠履三千客

珠履（立派な靴） 三千の客

談笑塵百城

談笑して 百城に塵ちりせしを（注28）

道義俾人迂

道義 人をして迂ならしめ

天下輕儒生

天下 儒生を軽んず

功利縦横策

功利 縦横の策

寸分重刑名

寸分にも刑名を重んず

会客飲斗酒

客と会して斗酒を飲めば

黄金揮手輕

黄金 手を揮いて輕し

眼中空英豪

眼中 英豪 空しく

氣象横雲瀛

氣象 雲瀛に横たわる

竭来復如何

竭来 復た如何せん

愴然遺世情

愴然として世情を遺れたり

⑤南方有美人

南方に美人有り

寤寐独懷之

寤寐（寝ても覚めても） 独り之を懷う

相岐未数月

相岐れて未だ数月ならざるに

已有三秋思

已に三秋の思い有り

新識日幾人

新識 日に幾人ぞ

不若一旧知

一旧知に若かず

襟期向誰許

襟期〔胸のうち〕誰に向かいてか許さん

相思復斯詩

相思いて斯の詩を復す

忽接千里書

忽ち千里の書を接りうけと

欲読意先馳

読まんと欲して 意 先ず馳す

美人家峻谷

美人 峻谷に家し

芙蓉被清池

芙蓉 清池を被う

皓月湛浥露

皓月 浥露を湛え

幽光盈虚帷

幽光 虚帷に盈つ

酣歌颺雲漢

酣歌して 雲漢に颺がり

欲捧王母卮

王母の卮を捧げんと欲す

道阻不可就

道 阻しくして 就く可からず

惆悵倚天涯

惆悵として天涯に倚る

⑥ 欲廉則不富

廉ならんと欲すれば則ち富まず

欲謙則不貴

謙ならんと欲すれば則ち貴からず

自古有道士

古より有道の士は

窮餓寡所慰

窮餓して慰むる所寡なし

彼哉趙孟榮

彼なる哉 趙孟榮

玉食饜加餼

玉食〔贅沢な食事〕して餼を加うるに饜(註29)く

固窮我知之

固より窮するは (注30) 我 之を知れり

順天復奚畏

天に順えば 復た奚をか畏れん

瓠徒無用

瓠 大なるも 徒だ用無きのみ

風物弄藻蔚

風物 藻蔚〔美しい文辭〕を弄ばん

傾義暝林光

傾義〔落日〕 林光を暝くし

晚蜩喧如沸

晚蜩〔ツクツクボウシ〕 喧しきこと沸くが如し

何時商飈至

何れの時か 商飈〔秋風〕 至れる

天地多金氣

天地 金氣〔秋の氣配〕 多し

四海方薦瘥

四海 方 (平ましき かせ) 瘥 (注31) を薦ねたり

元老在忠毅

元老は忠毅に在り

一人憂社稷

一人 社稷を憂うるのみ

鄙人違恤緯

鄙人は緯を恤うるに違あらんや (注32)

⑦ 大人為民上

大人を民の上と為す

所以有大憂

大憂有る所以なり

心苟存社稷

心に苟も 社稷 存せば

豈可為躬謀

豈 躬の為に謀る可けん

誰能奏膚公 (注33)

誰か能く膚公を奏せん

逸豫為公侯

逸豫たるを公侯と為す (注34)

緬想仲山甫

緬想〔はるかに思いやる〕す 仲山甫〔周王朝中興の臣〕

補袞古所尤

袞を補(注35)いしは古の尤すぐれたる所

周宣中興業

周宣〔周の宣王〕 中興の業

元戎旆旌悠

元戎〔大きな兵車〕 旆旌〔旗〕 悠なり

蠢爾彼匪茹

蠢爾として彼 茹はかられず(注36)

何以壯其猶

何を以てか其の 猶はかりごとを注36壯んにする

野人亦何意

野人 亦 何をか意わん

采芹水中洲

芹を水中の洲に采る

猷之君王側

之を君王の側に猷(注37)じ

瞻望威鳳樓

威鳳樓(注38)を瞻望す

⑧ 惇惇寡所交

惇惇〔憂えるさま〕として交わる所寡なく

静退且優遊

静退し且つ優遊す

偶与故人遇

偶たま故人と遇わば

欣然相延留

欣然として相延留す

興到挈壺觴

興 到らば 壺觴とを挈り

嗚嗚聊復謳

嗚嗚〔擬音語〕として聊か復た謳う

鷄鳴忙舜跖

鷄 鳴くや 舜 跖 忙しけれども

孜孜何所求

孜孜として何の求むる所ぞ(注39)

腐儒輟道義

腐儒は道義を輟め

賢者尚苟偷

賢者は苟偷〔かりそめの安楽を貪ること〕を尚ぶ

胡俾杞人憂

胡ぞ杞人をして憂えしめん

蒼天事悠悠

蒼天は 事 悠悠たり

謳亦誰能聽

謳わんも 亦 誰か能く聽かん

洞洞來殷憂

洞洞として 殷憂〔深い憂い〕 来る

⑨憂去宜更笑

憂い去らば宜しく更めて笑うべし

人生能幾何

人生 能く幾何ぞ

清醕傾百壺

清醕 百壺を傾け

陶然酣且歌

陶然として 酣たのしみ且つ歌わん

融融無碍滯

融融として 碍滯 無く

綽綽寬包羅

綽綽として 寬く包羅せん

憂亦不至傷

憂うるも 亦 傷むに至らず

期在大義科

期するは 大義の科せらるるに在り(注4)

大義匪躬故

大義は躬が故に匪ず

天歩不可蹉

天歩は 蹉く可からず

⑩園林嘉夏景

園林は 夏景 嘉し

冲融萬象施

冲融〔やわらぎ〕 萬象に施す

朱華発離離

朱華〔赤い花〕 発して離離〔濃密〕たり

素蘂亦紛披

素蘂〔白い花〕も亦 紛披〔咲き乱れている〕たり

微風度箏簾

微風 箏簾〔イグサや竹の筵〕を度りわた

爽涼生縞絺 爽涼 縞絺〔縮み織りの服〕に生ず

高柳蟬声永 高柳 蟬声 永く

静境流光遲 静境 流光 遅し

幽人独掩門 幽人 独り門を掩う

匏繫欲何為 匏繫〔閑居〕して何をか為さんと欲する

举世絶忠厚 世を挙げて 忠厚 絶えたり

大雅孰扶持 大雅 孰か扶持せん

嗒焉不能言 嗒焉として言う能わず

聊作消遣詩 聊か消遣の詩を作りぬ

隠居して仕えず、貧しい暮らし。都は賢い人ばかり。貧儒は時宜に疎い。文学など金にはならぬのに、それでも吟哦をやめられない。世間は金ばかり。刎頸の友など、どこにいようか。龍蛇〔傑出した人物〕が困窮し、虫けらにあざ笑われている。孔子のような聖賢も、結局は道を実現することができぬから、一生嘆き続けるだけ。だから、孔子は達人とは言えない。読書人の生き方などやめ、酒を飲んで酔って暮らせば、しばらくでも天真を回復することができる。毎日多くの人と知り合いになるが、一の旧知に若かない。しかし、なかなかその人の近くまで行くことはできない。その人は一人、社稷を憂えている。そのような人もいないわけではないが、全体的に見れば、世の中には忠孝の道が絶えている。大雅を扶持する人など、どこにもいない。消遣の詩でも作るしかない。……孔子や老子までもこき下ろし、最後は陶淵明の境地に帰している。

この詩の第十首の「大雅孰扶持」といい、上述の「詠懷」第一首の「安得大雅揚」といい、李白の「大雅久不作、吾衰竟誰陳」を連想させるが、雨山は「大雅」を文学上の意味のみにとどめず、高尚雅正の徳目・徳望といった意味で使っていると見

ていいだろう。漠然とした意味合いの語ではあるが、雨山の理想としたものが感性的に表された、ある意味、キーワード的な言葉の一つであるような感じがする。

連載の最終日には、『日本』の詩欄を担当していた種竹山人―本田種竹（二八六二―一九〇七）と太白山人―国分青崖の評が付されている。

種竹山人曰、阮嗣宗詠懷、陶冶性靈、厥旨淵放、郭茂倩（注1）遊仙、寄思縹渺、暗含感慨、陶靖節飲酒、性情所至、語多托興。此等諸作、千古絶大文章、而大抵出于傷時憤世之餘、自有欲抑而不能抑者。雨山此篇、未必專家、時成雜調、然已出入三家門徑、挹精摘美、頗費功力、至如其氣象渾成音節諧調者、則殆有入神之妙。此雨山擅場、餘子皆不及焉。〔阮嗣宗の「詠懷」は、性靈を陶冶し、厥の旨淵放（深遠で拘りなく気まま）なり。郭茂倩の「遊仙」は、思いを縹渺に寄せ、暗に感慨を含む。陶靖節の「飲酒」は、性情の至る所、語多く興を托す。此れ等の諸作は、千古絶大の文章にして、大抵時を傷み世を憤るの餘に出て、自ら抑えんと欲して抑うる能わざる者有り。雨山の此の篇は、未だ必ずしも專家ならず、時に雜調を成せども、然れども已に三家の門徑に出入し、精を挹り美を摘み、頗る功力を費やし、其の氣象渾成にして音節諧調する者の如きに至つては、則ち殆ど神に入るの妙有り。此れ雨山場を擅にし、餘子は及ばず。〕

太白山人曰、雨山五古、氣以実志、志以定言、陶冶情性、吐納英華。故響逸而調遠、風清而骨峻、洵五言之長城也。消遣十首、高論宏裁、睥睨流俗、而滿腹不平骯髒之氣、溢筆墨間。此阮嗣宗之流亞、固非浮文弱植、縹渺附俗者所企及。鍾嶸論步兵詩曰、言在耳目之内、情寄八荒之外、洋洋乎會於風雅、求之方今詩人、其唯雨山歟。〔雨山の五古は、氣以て志を實たし、志以て言を定め、情性を陶冶し、英華を吐納す。故に響き逸にして調べ遠く、風清くして骨峻しく、洵に五言の長城なり。〕消遣十首は、高論宏裁、流俗を睥睨し、而して腹に満てる不平骯髒（高ぶつて屈しない）の氣、筆墨の間に溢れたり。此れ阮嗣宗の流亞にして、固より浮文弱植、縹渺として俗に附する者の企及する所に非ず。鍾嶸 歩兵の詩を論じて曰く、「言耳目の内に在り、情八荒の外に寄せ、

洋洋乎として風雅に会す」と。之を方今の詩人に求めば、其れ唯雨山か。」

種竹の評はほぼ的を射ていると言つてよからう。なお、「未だ必ずしも專家ならず、時に雜調を成す」という評言の「雜調を成す」は、第三首の末句が押韻していない点などを暗に指すものであろうか。「未だ必ずしも專家ならず」は、「題蘭城遺稿」に対する種竹の評の中に出てくる雨山を「読書人」とする捉え方（後述）と表裏する関係にあるかと思われる。ただ、この点に関しては、当時の詩人を、詩作への取り組み方などの観点から捉え直すことが前提となるので、今は深入りしない。

なお、「消遣」は、其十だけ独立させた形で、『新詩綜』第三集（三十二年六月五日）に掲載されており、そこに記されている雨山についての紹介の辞と詩評（いずれも同誌の主宰者森槐南の執筆と考えられる）が参考になるので、掲げておこう。

雨山力追正始、涉筆輒作魏晋人語。風清骨峻、辞旨淵放、往往澹冶理趣。曾謂誓不作唐以後調。予初疑其染李王習氣。後讀其篇什、胸次高曠、迥絕塵埃、知非甘做優孟衣冠者。（雨山は力めて正始^{注12}を追い、筆を涉^{うご}かせば輒ち魏晋人の語を作す。風清く骨峻、辞旨淵放、往往にして理趣澹冶（普く行き渡っている）なり。曾て謂えり誓いて唐以後の調を作さじと。予は初め其の李王の習気に染まれるならんかと疑えり。後其の篇什を読むに、胸次高曠にして、迥かに塵埃を絶したり、甘んじて優孟の衣冠^{注13}に倣う者に非ざるを知る。）

豊辞映蔚、響高而氣古。規規攻選体者断乎不能。（豊辞映蔚、響き高くして氣古し。規規として選体（『文選』のスタイル）を攻むる者は断乎として能わざらん。）

また、「消遣并序」と題する五言十二句の作品が『花香月影』第五十二号（三十三年六月二十八日）に掲載されている。同じタイトルだが、これは「天地は窮まり無く、万物各おの時を得」ているのに対し「己を顧みて慨然」（いずれも序）たる気持ち

になって作った作品で、趣を異にしている。

(3) 「閒居十首」

三番目に、「閒居十首」(『日本』二十七年十二月三十一日)を見てみよう。

閒居十首

① 閒居何所為 閒居して何の為す所ぞ

吟哦唯自慰 吟哦して 唯 自ら慰めんのみ

将相奏爾時 将相は爾その時またれるを奏たまめ(注45)

国士念敵愾 国士は敵愾を念う

征夫劳万里 征夫 万里に勞し

嫠婦不恤緯 嫠婦(寡婦)は緯を恤(注46)えず

人咸有职守 人 咸 职守有れども

所帰在忠毅 帰する所は忠毅に在り

詩人敦厚旨 詩人 敦厚(雄渾な風格)を旨とす

雅頌何藻蔚 雅頌 何ぞ藻蔚(文辞が美しい)なる

已負骯髒意 已に骯髒の意に負き

恬安亦寡畏 恬安(安逸)にして 亦 畏ること寡なし

秋来凜氣象

秋来 氣象 凜たり

霜稜萎百卉

霜稜 百卉を萎れしむしお

②昔□少壯時

昔□ 少壯の時

負氣不知憂

氣を負い 憂いを知らざりき

偶読四君伝

偶たま四君〔戦国四君〕の伝を読めば

俠豪軽王侯

俠豪 王侯を軽んぜり

焉念蓬華賤

焉くんぞ念わん 蓬華〔貧しい住まい〕の賤しきを

曾揮千金遊

曾て千金を揮いて遊びぬ

意固小天下

意 固より天下を小とす

積債何肯休

債を積むも 何ぞ休むるを肯ぜん

回首彼一時

首を回らせば彼も一時

今将何所求

今 将た何の求むる所ぞ

③人生如転蓬

人生は転蓬の如し

曹植欲歎哉

曹植 歎かんと欲するかな

偶与故根遇

偶たま故根と遇えば

芳華趁春開

芳華 春を趁いて開く

白露墜高秋

白露 高秋〔空が高く晴れ渡る秋〕に墜ち

楓槐俱彫摧

楓槐 俱に彫み摧く

瞥然榮瘁改

瞥然〔突然〕として 榮瘁〔茂ると枯れると〕 改まり

捲地悲風催
暫時(注7)莫辭歛

地を捲きて 悲風 催す
暫時 歛を辞する莫かれ

歌以尽爾盃

歌いて以て爾の盃を尽くせ

試問陳蔡客

試みに問わん 陳蔡の客

道窮欲何哀

道 窮まりて 何をか哀しまんと欲する(注8)

飢來如聖何

飢え來らば 聖を如何せん

累累猶裴徊

累累として猶お裴徊〔たちもとおる〕す

④ 枯葉離枝条

散落隨飄風

散落して飄風に隨う

翩翩未着地

翩翩として未だ地に着かざるも

安思委塵中

安くんぞ塵中に委すてられんことを思わんや

踏藉埋黃泥

踏藉〔踏みにじる〕せられて黃泥に埋まる

榮華轉眼空

榮華 眼を轉ずるうちに 空し

天地妬全名

天地は名を全うするを妬み

竭來老英雄

竭來 英雄を老いしむ

念之使人傷

之を念えば人をして傷ましむ

秋氣颯高穹

秋氣 高穹〔天空〕に颯たり

⑤ 嵇阮何為者

蹇蹇不合時

嵇阮は何なん為る者ぞ
蹇蹇として時に合わず

行事多詭激 事を行うに 詭激〔中正を失い過激なこと〕 多く

往往匪常軌 往往にして常軌に匪^ず

独觀其詞章 独り其の詞章を觀るのみならんも

痛言使人悲 痛言 人をして悲しましむ

拘儒挾訾議 拘儒〔融通の利かぬ學者〕 訾議〔非議〕を挾むも

区区復何知 区区として復た何をか知らん

彼元忼慨士 彼 元 忼慨の士

不屑庸俗為 庸俗を為すを屑しとせず

雲鵬期高拳 雲鵬は高く拳がらんことを期す

遑顧斥鴳嗤 斥鴳〔みそさざいの類の小さな鳥〕の嗤うを顧みるに違あらんや(注49)

⑥陶潜高潔士 陶潜は高潔の士

齊跡沮溺倫 跡を沮溺の倫〔隱者たち〕に齊しくす

歸去有田園 歸り去らば田園有り

未至若吾貧 未だ吾の若き貧に至らず

采菊見南山 菊を采りて南山を見

復問桃花津 復た桃花の津を問う

千歲多碌碌 千歲 碌碌たること多けれども

彼較獲天真 彼は較^ほ天真を獲たり

不為斗米役 斗米の役するところと為らず

吾慕于斯人

吾 斯の人を慕う

⑦ 鳳鳥久不至

鳳鳥 久しく至らず

道義屬腐儒

道義 腐儒に属す

庸愚謂忠信

庸愚をば忠信と謂い

而嫉狂簡徒

而して狂簡〔志が大きく行いがぞんざいなこと〕の徒を嫉む

三代直道治

三代は直道にして治まりき

胡俾斯民迂

胡ぞ斯の民をして迂ならしめん

騏驥愧槽櫪

騏驥〔優れた馬〕は槽櫪〔馬小屋にいること〕を愧じ

英豪隱玉壺

英豪は玉壺〔酒壺〕に隠る

遠哉鴟夷子

遠い哉 鴟夷子

散髮老五湖

髪を散じて五湖に老いたり

⑧ 処世莫区区

処世 区区たる莫かれ

且尽一壺醇

且く尽くさん 一壺の醇〔よく熟した味の濃い酒〕

棲棲何所得

棲棲〔忙しくするさま〕として何の得る所ぞ

見笑大觀人

大觀の人〔大局から事物を観察している人〕に笑われん

醉当歌風瀾

酔わば当に歌うこと風瀾〔滑らかで抑揚のある様〕たり

落落率爾真

落落〔磊落〕として爾の真に率うべし

何者抱遺經

何者遺經〔昔から伝わってきた経書〕を抱き

迂誣説先民

迂誣〔回りくどいでたらめをいう〕して先民〔古代の賢人〕を説く

拘拘為形役

拘拘〔こだわる様〕として形〔形骸〕の役と為る(注21)

爰彼取聖神

爰いずくにか彼の聖神〔古代の聖人〕を取らん

⑨秋來陽卉腓

秋來りて 陽卉かれしお 腓る

少壯能幾時

少壯 能く幾時ぞ

虛名累朽骨

虛名は朽骨を累つかれしむ

且尽百千扈

且く尽くさん 百千の扈

楓槭照顏媚

楓槭 顏媚を照らす

可重林下期

林下の期〔山林に隠れ住む者同士の約束〕を重かさんず可(注22)し

何為日遑遑

何の為にか日に遑遑として

勢利唯是追

勢利 唯 是れをのみ追(注22)わん

榮祿使人愚

榮祿は人をして愚かならしむ

纔取足療飢

纔かに飢えを療すに足るを取らんのみ

作詩寓微言

詩を作りて微言〔奥深い言葉〕を寓し

聊復有所思

聊か復た思う所有り

放歌蔑人世

放歌して人世なみを蔑し

昂当然何之

昂ぶりて当に然りとして何くにか之くべき(注23)

⑩我誦昔賢詩

我 昔賢の詩を誦するに

何多痛憤言

何ぞ 痛憤の言 多き

尋其悱惻意

其の悱惻〔憂慮〕の意を尋ぬれば

忠厚義自存

忠厚の義 自ら存すおのずか

嗟歎人欲老

嗟歎す 人 老いんと欲すれば

徜徉寬乾坤

徜徉(さまよう)して 乾坤を寛くす

落落達人觀

落落(ひとときわ高い)たる達人の觀

不縻世俗煩

世俗の煩わしさに縻がれず

長嘯復如何

長嘯せば復た如何

恐為傍人喧

恐らくは傍人の喧かまひすしくするところと為らん

尚友味道腴

尚友(古人を友として)道腴(道の精髓)を味わい

閒居闔掩門

閒居して闔として門を掩う

この当時は日清戦争の真つ最中だった。非常時に安穩と、言葉を飾り立てた漢詩ばかり作っている詩人に対する批判。自分にも昔はあった戦国四君のような覇気も、今ではなくなってしまった。時世に合わず、行動が中正を欠き、往々にして常軌を逸する嵇康や阮籍への共鳴。世と相容れぬ自分をいろいろな形で吐露したあげく、また閑居して門を鎖す。

この作に対する種竹の評を挙げておこう。

種竹山人曰、劉公幹之清剛、郭茂倩(注55)之儻上、陶元亮之真淳、阮嗣宗之淵放、殆莫不兼至而具有、食古能化者、今吾於雨山人見焉。「劉公幹(劉楨)、建安七子の一人」の清剛、郭茂倩の儻上(飛び切り優れている)、陶元亮の真淳、阮嗣宗の淵放、殆ど兼ね至りて具有せざるは莫し。古を食うけれて能く化する者は、今 吾 雨山人に於いて見たり。」

(4) 「夏日并序」其二

ここまで数編の作品において見てきたような詩意は、少なくとも三十二年ごろの作品に至るまで、これを見出すことができ、しかも為政者に対する不満や諷刺の表現が、少しずつではあるが、度を増してくる。「蓋聞夏之為言仮也。夫仮則寛舒、寛舒則倦怠、倦怠則昏昏蕩蕩、曲肱而睡、如是者清世之逸民、先王之惰民也。□生^甲作為此詩、凡百君子、敬而聽之。〔蓋し聞く夏の言たる仮（大きい、盛んの意）なり。夫れ仮なれば則ち寛舒に、寛舒なれば則ち倦怠し、倦怠すれば則ち昏昏蕩蕩として、肱を曲げて睡る。是くの如き者は清世の逸民にして、先王之惰民なり。□生^甲此の詩を作為す。凡百の君子、敬しんで之を聴け。〕との序をもつ、五言古詩の連作「夏日并序」（『日本』二十九年七月二十八日）の第二首を見てみよう。

夏日并序其二

煩炎厥民困(注36) 煩炎に 厥の民は 困くるしめども

臺榭就高明 臺榭は高明に就く〔空高くなつていく〕

密林圍繞之 密林 之を圍繞し

爽涼清蔭成 爽涼 清蔭 成す

天下今苦暍 天下 今 暍〔暑気あたり〕に苦しむ

災異矧荐生 災異 矧おのんや 荐りに生すず

既栗海立變 既に栗おのく 海 立ちどころに變ずるに

又驚鴻水横 又 驚く 鴻水〔大水〕 横たわるに

蚩蚩者何辜 蚩蚩たる者〔愚かな民〕 何の辜かあらん

彼蒼蒼何情 彼の蒼蒼〔天のこと〕 何の情かあらん

逸人不知憂 逸人〔隱士〕は憂いを知らず

長夏愛沖清 長夏 沖清〔あつさりとした心持ち〕を愛す

宰相不問大 宰相 大を問わずんば

熒惑頗逆行 熒惑〔兵乱の兆しを示す星〕 頗る逆行せん

文字曰、政失於夏、熒惑逆行。〔文字に曰く、〕政 夏に失すれば、熒惑 逆行す」と。

寄言采詩者 言を采詩者〔注〕に寄せん

聽我揚怨声 聽け 我 怨声を揚ぐるを

この作品が掲載される一カ月餘り前の六月十五日には、東北地方の太平洋側でいわゆる「明治三陸大津波」が発生し、約二万名の死者を出した。この作品は中国古来の天人相関説に基づき、災異を引き起こした張本人として、安逸に慣れ、重要問題に取り組もうとしない当時の為政者を責めているのである。

種竹の評は次の通り。

種竹山人曰、序中自謂、凡百君子、敬而聽之。已見抱負之大、復絶乎人、及讀二詩、問諷激刺、皆与風人之旨不相悖、所以非其位而言之者、是臣子〔注〕忠悞、亦不得已也。通篇詞古而意新、猶不失晋宋人矩度。〔序中に自ら、「凡百の君子、敬しんで之を聽け」と謂うに、已に抱負の大なること、人に復絶〔はるかに隔たる〕せるを見るも、二詩を読むに及んでは、問諷激刺〔激しくそしめる〕し、皆風人〔采詩の官〕の旨と相悖らず。其の位に非ずして之を言う所以の者は、是れ臣子の忠悞、亦 已むを得ざるなり。通篇 詞は古くして意は新たに、猶お晋宋人の矩度〔規律〕を失わず。〕

(5) 「春夜」

三番目に取り上げた「閒居十首」に「戦時に安穩と、言葉を飾り立てた漢詩ばかり作っている詩人に対する批判」を読み取ることができたが、次に取り上げる「春夜」(『日本』三十二年三月三十日)では、日清戦争が庶民にもたらした不幸が詠まれている。戦死した士官の妻が作品の主人公で、白居易の「琵琶行」に似通ったストーリー性も備わっている。

春夜

花林香霧籠斜陽	花林の香霧 斜陽を籠め
柳堤澹烟迷春望	柳堤の澹烟 (淡い霞) 春望を迷 <small>お</small> う
千家簾幙締霞綺	千家の簾幙 (簾と幕) 霞綺 (美しいあやぎぬ) 締められ
玄都桃連碧谿棠	玄都 (神仙の住まい) 桃は 連なる 碧谿 (緑の溪流) の棠
花柳艸座選妓舞	花柳 艸座 妓を選びて舞わしめ
綵楼雕幃貴客觴	綵楼 雕幃 (華美な装飾をした車) 貴客 觴 <small>さかもり</small> す
春日遲遲猶苦短	春日 遅遅たれども 猶お短きに苦しみ
蘭膏銀燭樂未央	蘭膏 銀燭 樂しみ未だ央 <small>あ</small> きず
西楼有人心恨誰	西楼に人有り 心に誰をか恨む
深坐背月斂蛾眉	深く坐し 月を背にして 蛾眉を斂 <small>ひそ</small> む
懶見東莊春嬉宴	東莊 春嬉の宴を見るに懶く
悵抱瑤琴下手遲	悵として瑤琴を抱くも 手を下すこと遅し

一彈再彈寒玉臂
三彈四彈曲調悲
欲語幽怨曲暫緩
聽者歎歎肝腸斷
去年王師征遼朔
良人仗劍從虎軀
赴敵奮鬪向無前
首功独称萬人擢
天忌全功不生還
恨埋沙場雲漠漠
遺孤無愁待爺歸
妾身無家哭啜啜
纔理田宅送餘生
寡孤相依誰与樂
今春王稅加徵求
粥糜不飽衣亦薄
奪妾粥糜褫妾衣
東莊貴客腹独肥
貪得歲餽二千金

一彈 再彈 玉臂〔美しい腕〕 寒く
三彈 四彈 曲調 悲し
幽怨を語らんと欲して 曲 暫く緩めば
聽く者 歎歎〔すすり泣く〕し 肝腸 断つ
去年 王師〔天皇の軍隊〕 遼朔を征し
良人 劍を仗ち 虎軀〔將軍の陣中〕に従う
敵に赴き奮鬪して 向かうところ前〔敵〕無く
首功 独り称えられ 萬人に擢でらる
天 全功〔完璧な功〕を忌み 生還せず
恨むらくは沙場に埋められ 雲 漠漠たり
遺孤は愁うる無く 爺〔父〕の歸るを待つも
妾身は家無し 哭すること啜啜たり
纔て田宅を理め〔処分する〕て餘生を送る
寡孤 相依る 誰と与にか樂しまん
今春 王稅 加えて徵求するも
粥糜〔かゆ〕 飽かず 衣も亦 薄し
妾が粥糜を奪い 妾が衣を褫い
東莊の貴客 腹 独り肥えたり
歲餽二千金を貪り得て

張宴高樂醉春菲

宴を張り樂を高くして春菲〔春の美〕に酔う

昔聞仁人恤無告

昔 聞けり 仁人は無告を恤むと

今見貪士忘民饑

今 見る 貪士の民の饑えを忘れたるを

生離別復死離別

生きながら離別し 復た死して離別す

一曲欲終哀絃裂

一曲 終わらんと欲して 哀絃 裂けたり

春寒逼肌不堪彈

春寒 肌に逼りて 弾くに堪えず

投琴伏泣声欲絕

琴を投げ 伏して泣き 声 絶えんと欲す

落花無情撩頰鬢

落花 無情に頰鬢に撩りまじわ

春雲掩月鶻啼血

春雲 月を掩い 鶻〔ホトトギス〕 血に啼く

東莊不識西樓愁

東莊は西樓の愁いを識らず

玉簫金管不少休

玉簫金管〔妙なる管弦の音〕 少しも休やまず

坐中総是季倫輩

坐中 総べて是れ季倫の輩

金谷豪華誇夜游

金谷は豪華に 夜游を誇るほめ

春夜之興興不尽

春夜の興は 興 尽きず

春夜之恨恨悠悠

春夜の恨みは 恨み悠悠たり

嗚呼春夜之恨恨悠悠

ああ 春夜の恨みは 恨み悠悠たり

一年中歌舞音曲の響きの絶えることのない「東莊」に引き替え、「西樓」では眉をひそめた女性が、憂わしげにやおら琴をつま弾き始める。その音色に込められているのは、女性の深い恨みである。夫は向かうところ敵なき戦功をあげたが、生還せ

ず、沙場に埋もれたまま。女性は土地家屋を売却して、かろうじて未亡人としての日々を送っているのに、今春から増税が行われ、食べる物も着る物もますます不如意になっていく。……東荘では「春夜の興」がいつまでも尽きぬのに対し、西楼では「春夜の恨み」がいつまでも尽きないのである。

日清戦争で軍事的勝利は収めたものの、たちまち露・仏・独の干渉で、遼東半島の返還を余儀なくされた。日清戦後の日本は、一層の富国強兵を目指し、そのための政策の一環として政府は各種の増税案や関係諸法案の成立を図ったのである。

この作品には桂湖村（一八六八～一九三八）の評が付されている。

湖邨小隱曰、句調婉暢、辞藻綺豔、或如走雲流月、或似繡鸞織鳳、初唐之儂麗、中唐之敷演、兼該有之。春非以下、酣醅嬉嬉、意到筆從、情致委宛、寄托遙深、溫柔敦厚之旨亦存矣。少陵劍器行、借大娘以傷往事、大原琵琶行、托商婦以悲遷謫。此篇則獨開生面、稱為兩山樓集中別調。（句調婉暢にして、辞藻は綺豔に、或いは走雲流月の如く、或いは繡鸞織鳳に似たり。初唐の儂麗、中唐の敷演、兼該して之有り。春非以下は、酣醅嬉嬉、意到れば筆從い、情致委宛に、寄托遙深にして、溫柔敦厚の旨も亦存せり。少陵の「劍器行」は、大娘を借りて以て往事を傷み、大原（白居易の出身地。ここでは白居易のこと）の琵琶行は、商婦に托して以て遷謫を悲しむ。此の篇は則ち独り生面を開き、称して兩山樓集中の別調と為さん。）」

湖村は（この作品は新生面を開いており、兩山の作品中、これまでとは別の調べのものと称せられよう）と評しているが、筆者には、詩意の点では、これまでに取り上げてきた諸作品の延長上にあるもので、諷刺の度合いがやや増した程度の差に過ぎないと思われる。

(6) 「九日并序」

「詠懷」系統の作の最後として、二十八年十一月九日の『日本』所載の「九日并序」^(注7)を挙げよう。

九日并序

夫秋之氣為金、於理為義。廉厲肅殺、俾秋士悲傷矣。蓋聞人在陽則舒、在陰則慘。慘則尠于歡。矧余作客十月、悵悵勞、指孤鴻而寄情、望飛雲以騁思。節值重陽、芳菊發英。秋興不禁、登高舒嘯。「夫れ秋の氣は金と為し、理に於いては義と為す。^(注8)廉厲として肅殺し、秋士（年をとつても不遇の男）をして悲傷せしむ。蓋し聞く 人は陽に在れば則ち舒ぶるも、陰に在れば則ち^(注9)惨み、惨めば則ち歡ぶこと尠しと。矧んや余は客と作ること十月、悵悵（恨み嘆く様）勞勞（疲れた様）、孤鴻を指して情を寄せ、飛雲を望みて以て思いを騁す。節 重陽に値い、芳菊 英を發く。秋興 禁ぜず、高きに登りて舒嘯（歌を吟じる）しき。」

寥廓澈灑天 寥廓として 灑天（空） 澈^すみ

山川媚爽明 山川 媚^{うつく}しく爽明なり

遠林断飛鳥 遠林 飛鳥 断え

游雲散秋城 游雲（空に漂う雲） 秋城に散ず

悠悠緘礙絶 悠悠として 緘礙 絶え

森森萬象横 森々として 萬象 横たわる

登高騁逸興 高きに登りて 逸興（世俗を離れた風流の趣）を騁すれば

慨然傷我情 慨然として我が情を傷ましむ

長嘯多落木 長嘯(注70) 落木 多く

哀颺晚柯鳴 哀颺(悲しげな風) 晚柯鳴る

幽巖露奇姿 幽巖(奥深い所にある岩) 奇姿を露し

青松抱餘青 青松 餘青を抱く

芳菊耀霜下 芳菊は霜下に耀(注71)き

可餐彼落英 彼の落英(落ちた花びら)を餐(く)う可し

俯仰歎緬邈 俯仰して緬邈(はるかなこと)を歎(なげ)ずるも

拳世嘲秀貞 世を拳(こぶ)げて秀貞(優秀で行いの正しい人)を嘲る

持醪聊自慰 醪(しりしけと)を持りて聊か自ら慰めんとするも

憂来觴難傾 憂い来りて 觴 傾(注72)け難し

昔賢良已杳 昔賢は良(よ)しく已に杳(なほ)たり

惆悵誰与行 惆悵として誰と与にか行かん

秋の悲哀、望郷の念、自己の不遇への不満などが詠まれていると言つていいだろう。

その他、陶淵明の詩句を韻字として夏の日を過ごす隱遁者的な気分を詠んだ十首連作の五絶―「銷夏吟以涼風起將夕夜景湛虛明為韻」(「日本」二十九年八月十五日)、皇居もしくは国会議事堂の前を通つた時にこみあげてきた政治への期待を詠んだ五古(十六句)―「君子有所思」(「日本」同年十一月二十二日)、人生は短いから「傑士」たる者功を立てるため忘れてはならぬと歌う五古(二十句)―「有所思」(「日本人」第七十号、三十一年七月五日)なども、これまでに見てきた雨山の詩境と連続するものと言つていいだろう。

六、その他の作品―交往詩、その他

詩歌には贈答や送別などをはじめとして、人間同士の交際の手段としての機能がある。そのような類の作品を「交往詩」と称することにする。上述の鄭孝胥との唱和の作もまさにそのようなもの一つだが、この方面の作はほかにもある。

二十三年十一月九日の『朝野新聞』には、雨山が松原竹秋・渋谷香北^(注74)・巖深裳川(一八五五―一九四三)とともに「雨花書屋観菊」という題で詠んだ七絶が載っている。二十八年十月二十五日の『日本』には、この年の中秋節に雨山が禪僧天田愚庵(一八五四―一九〇四)と琵琶湖に浮かぶ竹生島へ月を見に行った時の五律が載っている^(注75)。また、その三日後の十月二十八日の同紙には福原周峰(一八二七―一九一三)・本田種竹らと愚庵を訪れた際の作が載っており、雨山の作は五絶である。同年十一月二十二日の『日本』には「懷種竹山人」と題する五古(十六句)の作が載り、二十九年十月十四日の同紙には松島(宮城県)を旅する種竹に贈る七絶―「聞種竹山人遊松島、有此寄」が載っている。『龍南会雑誌』(五高の校友会誌)第六十三号(三十一年二月十七日)には「賦得鶯有好音奉寿近衛翠山公八十八」と題する作が載っている。熊本の五高在職時の三十二年四月九日の『九州日日新聞』には、「祝九州日日新聞誌五千号」として七人の作が並んでおり、そのうちの一つが雨山の「同瞻彼^(注76)蘇山四章々四句」と題する作であるが、これは『詩経』を模した四言詩四首で、一人異彩を放っている^(注77)。また、同年九月九日の同紙には福岡県の船小屋温泉に行ってきた五高の同僚教師落合東郭(一八六六―一九四二)に贈る五古(三十六句)の諧謔の作―「聞東郭子自扶南姑射婦有此寄」^(注78)が掲載されている。

交往詩に属するものうち、二十九年八月二十六日の『日本』所載の七古(二十八句)「画歌贈梅山人」と、三十一年二月二十五日の同紙所載の雨山・愚庵の唱和詩とは、詩句もさることながら、これらに付された評が、雨山詩の他者評価として参考になるので、挙げておきたい。まず、前者に対する評。

黒木欽堂(注8)曰、此種詩在我子生老兄、則不多費巧思而成者矣。然其所造詣王六杜四、在他人千思萬搆、而始能得一二者。子生之於詩、可謂軼群之才也。〔此の種の詩は我が子生老兄に在りては、則ち多く巧思（心を砕いて考えること）を費やさずして成る者なり。然して其の造詣する所は王六杜四(注8)、他人に在りては千思萬搆して、始めて能く一二を得る者なり。子生の詩に於ける、軼群の才と謂う可きなり。〕

種竹山人曰、沉文愨謂、題画詩自少陵開出、後人往往宗之。此篇亦為然。渾灑雄健之処、有逼老杜者。兩山詩、長于五古、詎測七言長古、亦能至如此。可見才人伎倆、無施不佳。顧世之賞鑑家者、有此識而無此筆、詞章家、有此筆而無此識。兩山則可謂熊魚兩獲者矣。〔沉文愨謂、題画詩は少陵より開出し、後人往往之を宗ぶ。此の篇も亦然りと為す。渾灑（雄渾浩大）雄健の処は、老杜に逼る者有り。兩山の詩は、五古に長ずれども、詎測らんや七言長古も、亦能く此くの如きに至らんとは。見る可し才人の伎倆は、施すとして佳からざるは無きを。顧みるに世の賞鑑家なる者は、此の識有れども此の筆無く、詞章家は、此の筆有れども此の識無し。兩山は則ち熊魚をば兩つながら獲たる者(注8)と謂う可し。〕

兩山・愚庵の唱和詩は、愚庵（ここでは二休道人という号をもつて称されている）が「戊戌早春」・「詠懷」（いずれも五言六句）の二首を詠み、兩山（ここでは雨龍山人という号をもつて称されている）がそれぞれ和したものである。詩句の後に、兩山自身（ここでは何遠樓主人と名乗っている）の愚庵に対する評と桂湖村の評（兩山を何遠樓主と称している）が付してある。

何遠樓主人曰、忠憤耿介之語、発於敦厚惻怛之誠、饒得古君子遺意、是之謂真詩矣。非得性情之正者、恐不能至於此也。〔忠憤耿介の語、敦厚惻怛の誠より発して、饒かに古君子の遺意を得たり、是れを之真の詩と謂う。性情の正しきを得たる者に非ずんば、恐らく此に至る能わざらん。〕

湖村小隱曰、何遠樓主評語、本為二休道人発、然亦可以直評雨龍山人也。区而論之、道人詩唐而有古音、山人詩古而有唐

音。一以秀明樸淳見長、一以華瞻峻峭而勝。至興寄深微、風骨完厚、則竝克臻厥美矣。〔何遠樓主の評語は、本二休道人の爲に発せられたり、然れども亦以て直そのま、雨龍山人を評す可きなり。区わけて之を論ぜば、道人の詩は唐にして古音有り、山人の詩は古にして唐音有り、一は秀明樸淳を以て長〔特長〕を見し、一は華瞻峻峭を以て勝る。興を深微に寄せ、風骨完厚なるに至つては、則ち竝びに克く厥の美を臻きまめたり。〕

交往詩としては、他に二十九年十月十三日の『日本』所載の「寄青厓山人在小田原」、三十二年三月二十一日と二十三日の『九州日日新聞』所載の、落合東郭宅での熊本註84の詩人たちとの分韻の作（雨山は「壇」を得て、七律一首を詠んでいる）、三十二年七月十三日の『日本』所載の「和□欽堂隱士見寄」、三十四年十月三十日の『日本』所載の「薩州壯士行送山田濟濟ママ註86」などもある。その他、三十四年二月十三日の『国民新聞』所載の聯句「辛丑紀元節星岡茶寮星集席上柏梁体聯句」にも参加している。また、文ではあるが、『龍南会雑誌』第六十三号（三十一年二月十七日）所載の「一枝巢記」も、同僚の兒島猷吉郎の住まいを話のきつかけにして、人の生き方に関する議論を展開したものが、交往の作品と言つていいだろう。

二十七年八月四日の『日本』所載の「従軍行送六谷役朝鮮註85」と同年九月四日の同紙所載の「詠史」にも言及しておきたい。前者は、これも形式上は、交往詩ということになるうが、込められた感情は日常的な交際程度のものではない。詩題に見える六谷は、雨山の父竹嬾の門人で、父の死後、雨山を寓居させてくれた揚あや氏一族の揚硯堂の弟の揚忠三郎（一八六一―一九一〇）である。註86十四年、郷里高松で結成された詩社「淡社」の盟友でもあつた。詩は楽府体で、五言と七言が混じり、全十四句から成り、三度換韻する（四種の韻を用いる）註87変則的な詩形である。

次に「詠史」を見てみよう。

詠史

① 扶吾眼掛吳東門

吾が眼を抉りて呉の東門に掛けよ

子胥是言甚壯激

子胥の是の言 甚だ壯激なり

天之所賜何可逆

天の賜う所 何ぞ逆らう可けん

吳王不取乃自擊

吳王 取らずして 乃ち自ら撃たれたり

② 不殺勾踐国其墟

勾踐を殺さずんば 国 其れ墟あはてんも

宰嚭之徒眼無吳

宰嚭〔呉の宰輔伯嚭のこと〕の徒 眼に呉無し

黃池玉帛諸侯笑

黃池の玉帛〔吳王夫差が黃池で主宰した会盟のこと〕 諸侯に笑わる

鴟夷烟波渺五湖

鴟夷〔皮の袋〕 烟波 五湖に渺たらん

これは、その名の通り、詠史詩とするのが通例だろうが、発表の時機と、種竹の、

把史乘成語、以供驅使之用、著意剪裁、頗見力量。「天之所賜何可逆、吳王不取乃自擊」二句、今日西征諸將、不可無此一大勇斷。噫誰其眼中無全吳者。讀了慨久之。「史乘の成語を把りて、以て驅使の用に供す。著意〔着想〕剪裁〔材料のアレンジ〕、頗る力量を見る。「天の賜う所 何ぞ逆らう可けん、吳王 取らずして乃ち自ら撃たれたり」の二句、今日西征の諸將、此の一大勇斷無かる可からず。ああ誰か其れ眼中に全吳無き者ならん。讀了して慨くこと之を久しくす。」

という評語に照らすなら、少なくとも第一首は、清国との戦局に焦点を合わせた戦意高揚のための作ということになるのかもしれない。ただ、第二首は、結句をその主眼と見るなら、功成つた後、江湖に帰隱する越の范蠡の生き方を勧めるもので、戦

意高揚とはあまり関係がなく、むしろ上述の「閒居十首」第七首の詩境に通じるものも感じられる。

なお、日本人、とりわけ明治以降の日本人には作例のあまり多くない賦や辞の形式の作品も、雨山にはある。賦としては二十六年十一月二十九日の『日本』所載の「舟遊賦」があり、『楚辞』九歌に似通った趣を持っている。辞としては、二十八年四月四日の『日本』所載の、早逝した東大時代の同窓生、大作延寿郎の遺稿に題した「題蘭城遺稿辞」があり、種竹が「擬騷賦、非読書人、竟不能做出」〔騷賦を擬るは、読書人に非ずんば、竟に做し出だすこと能わざらん〕と評している。

七、まとめ―詩歌理想論を踏まえて

以上のように、交往詩をはじめ、雨山は様々なタイプの詩を作っているのだが、彼の青壮年期の詩の特色は、やはり初めに見たような「詠懐」系統の作品の方にあると言つていいだろう。

彼の中国古代詩歌に関する評論―「支那古代詩變」の発表は二十七年、二十八年、「詩想」の発表は三十年だった（前掲拙稿「長尾雨山青壮年期の詩論と詩作―初步的考察―」(1)）。「詠懐」系統の作品の発表は、二十六年から三十二年ごろまでに及んでいる。この時期、雨山が理想とした、「輕儂浮佻」ならず、「敦厚忠雅」かつ「雄渾蒼勁」で、「性靈を陶鑄する」力を具えた詩歌の詠作は、かなりの程度まで実現されたと見ていいのではないだろうか。

ここで、この系統の作品に対するものを中心として、雨山詩に対する他者評を振り返り、整理してみることにしたい。「消遣」第十首に付された評は、彼の当時の作詩態度を客観的に述べたものと言えよう。すなわち、雨山は阮籍・嵇康に代表される正始体を追求しており、唐より後の風格のものは作らぬと誓っていたという。槐南は、雨山は嵇康と阮籍の間で別に一家を成しており、陳子昂が力めて倣わんとしたものを実現できていると認めている。一方、種竹は雨山の詩境を阮籍・郭璞・陶淵明の三者になぞらえているが、筆者の見る所、郭璞との類似はさほどのものではないように思われる。いずれにせよ、青厓や

湖村も含め、総じて雨山の独特な詩境については、極めて高い評価を与えていたと言っている。

ここで、問題になるのは、雨山をして「時を傷み世を憤」り、「自ら抑えんと欲して抑うる能わざ」らしめ、また、「流俗を睥睨し、而して腹に満てる不平骯髒の氣、筆墨の間に溢れ」しめたものは、何だったのかということである。このような作品が詠まれたのは、主として彼が文部省と東京美術学校教授を退職して六年間のフリーの生活を送っていた時期である。この間、彼の内面に何らかの葛藤があったことが推察されるが、その具体的な様相は、現在得られている資料からは推し量りがたい。一方、彼の氣質もこれには関係する面があったようで、この点については後述したい。その前に、雨山自身の詩歌理想論に關して、若干補足させてもらうことにする。

【雨山の詩歌理想論に關する補足】前稿執筆の際、管見に入っていなかった雨山の詩歌理想論に關する資料を、ここで紹介しておきたい。一つは大作蘭城の「長尾子生近藁叙」(『統蘭城遺稿』卷上)で、雨山が語った言葉が引用されているだけでなく、蘭城の目を通して見た雨山の詠作姿勢も窺うことができる。この文については、杉村邦彦氏によってその分かりやすい訓注が提示されている。^(注5) もう一つは『日本』三十二年十月二十三日の「台陰談藝録」(当時、断統的に掲載されていた漢詩文批評コラム)に取り上げられている雨山評である。作者は「致遠」という筆名だが、牧野静齋である可能性が高い。致遠は三条に分けてコメントしているが、雨山の詩歌理想論がストレートに把握できる第三条のみ紹介することにした。

『書』云、「詩言志、歌永言。」盖有志而不言者非詩也。言而非志非詩也。詩而不可歌非詩也。歌而辞不达非詩也。故詩本言志、又貴其歌而辞達矣。所謂達也者、不惟其旨坦夷易曉。言含至理、情寓字外、格調音節、開闔長短、抑揚頓挫、各得其宜、使聞者一唱三歎手舞足蹈是也。此之不務、徒摸声音形貌、而自以為得、幾何其不為優孟之衣冠者也。往年雨山在京、与余論詩、大旨如是。世之傲雨山而学選体者、妄臚列華藻、雕琢字句、而毫無生氣、或高擬陶謝、冲澹自喜、而枯燥無味、或佶屈聱牙、言待注解、使人望見生畏、譬之蒙鬼面嚇小兒。自識者見之、不值一笑。『書』に云う、「詩は志を言い、歌は言を

永くす」と。蓋し志有れども言わざる者は詩に非ざるなり。言えども志に非ざるは詩に非ざるなり。詩なれども歌う可からざるは詩に非ざるなり。歌えども辞達せざるは詩に非ざるなり。故に詩は本志を言い、又其の歌いて辞達するをも貴ぶ。所謂達とは、惟だ其の旨坦夷にして暁り易きのみならず。言至理を含み、情字の外に寓し、格調音節、開闔長短、抑揚頓挫、各おの其の宜しきを得、聞く者をして一唱三歎手舞い足踏ましむるもの、是れなり。此れを之務めず、徒らに声音形貌を摸して、自ら以て得たりと為すは、幾何か其れ優孟の衣冠と為らざらん。往年雨山京に在りしとき、余と詩を論ずる、大旨是くの如くなりき。世の雨山に倣つて選体を学ぶ者は、妄りに華藻を臚列し、字句を雕琢すれども、毫も生氣無く、或るものは高らかに陶謝に擬して、冲澹自ら喜べども、枯燥無味、或るものは佶屈聱牙、言注解を待ち、人をして望見して畏れを生ぜしむること、之を譬えは鬼面を蒙りて小兒を嚇すがごとし。識者より之を見ば、一笑にも値せず。」

おわりに

雨山の「詠懷」系統の作品に頻りに表出される不平不満を「激情」の一種と見るならば、父の人となりについての長尾正和の回顧談も参考になるかもしれない。それは次のようなものである。

豪気の人にあり勝ちの非常な涙もろさをもち、読書中でも感激するとしばしば啼泣した。(中略)要するに多情多恨、生れつきの詩人であつて、激情が常に身内に燃えたぎつていた。幸いに逸脱もせず晩年にはむしろ温順の君子たり得たのは、学問の力と多年の修養によつたに外ならぬ。その溢れる感情が詩となり文となり書となり画となり、また酒となつたのである。^(注96)

さらには、雨山の青壮年期の詩風に「激しさ」が吹き込まれた要因の一つとして、彼が幼少期から尊崇してやまなかった明治維新の元勳にして漢詩人の副島種臣、号は蒼海（一八二八～一九〇五）との出会い、蒼海からの薫陶があったと思われる。正和に次のような回顧談がある。明治五年のマリアクルーズ事件での果敢なる措置や翌六年の特命全権大使としての北京での堂々たる談判を耳にして、雨山は幼心に蒼海に対する崇拜の念を抱いていたが、「二十四か五のころ」、すなわち二十一年か二十二年のころ、当時六十歳くらいの蒼海が「新聞の詩文壇」でたまたま雨山の作を目にし、国分青厓（かねてから蒼海の知遇を得ていた）に長尾雨山なる人物について問うた。青厓が「自分の親友雨山のことで知れる限りを」話すと、蒼海は「一度ひまの時に屋敷まで来るように」と言った。「青厓からその旨を聞いた雨山は歓喜の言葉を知らなかつた。」直ちに蒼海を屋敷に訪ね、爾来深く蒼海の「眷顧を受け学問の上達にも人格の錬磨にも絶大な益をえることにな」つた。（注98）

蒼海は、漢詩人としては、「清詩が流行し、其極盛を現出した」明治の詩壇にあつて、「別派の旗幟を樹立し」「漢魏を高唱し」た。（注98）雨山に生来、漢魏の詩風に惹かれる素地があつたかもしれない点に加え、人格の上で全面的な感化を受けていた蒼海からの影響も大きかつたことになるだろう。

雨山が蒼海の詩風をどのように見ていたかが示されている資料として、『日本』三十四年二月十二日の文苑に載つた、匿名（作者名の部分が「○○ ○○○○」となっている）の「哀清国」と題する作品（七律三首）に対する雨山評を挙げることができる。この作品は、『蒼海全集』に掲載されているので、蒼海の作と見て間違いないはずなのだが、当時の義和団の乱で衰弱していく清国と、これに対する方策を詠みこんだものなので、何らかの差しさわりがあり、匿名にしたものかと思われる。さて、雨山の評は、次のようなものである。

詠時事、而發至理、獎公道。不如是、則不可以起人啓人。杜子美善作詩史。然多哀声、但覺酸楚、何也。乏於至理公道之論也。如此篇、子美之所難矣。「時事を詠んで、至理を發し、公道を獎む。是くの如くならずんば、則ち以て人を起こし人を啓く可からず。

杜子美は善く詩史を作る。然れども哀声多く、但だ酸楚を覚ゆるのみなるは、何ぞや。至理公道の論に乏しければなり。此の篇の如きは、子美の難しとする所なり。」

「至理公道の論」という点で、蒼海の方が「詩聖」杜甫を上回るとされている。

より詳しい論述としては、ずっと下つて、上海からの帰国後まもなく、『大阪毎日新聞』の漢詩欄を主宰していたころのものになるが、同紙に「晩近漢詩壇の傾向―詩星漸く凋落し僅に石埭、竹隱を存す」と題する雨山の談話(注10)が掲載された。その最後の一段が参考になると思われる。

最後に述べたいのは上述専門詩人(注10)の外に明治の一大明星として光彩を添へたのは副島蒼海伯の詩である、蒼海伯が詩を作るのは座談の間にもサア作らうといふと、書生を呼び来つて口を突いて出づる語句を筆記せしむるのであるが、それが直に雄篇大作を成し、大概は一字一句をも改竄しない、詞藻の富贍なること洵に驚くべきものがある。其詩は漢魏六朝より唐時代までを根拠とし、明詩は稍喜べど宋と清の詩は採らない、又その詩論は、自ら堯舜たらんことを欲せば先づ自ら堯舜の心を以て心とし、堯舜の言ふところを言はねばならぬ、『論語』に「辞気を出して斯に鄙倍に遠ざかる」とあつて士君子の詩は士君子らしくなければならぬといふのである、恠ういふ意見であるから、其風格は如何にも雄偉宏大である、他の文学者諸君においても蒼海伯のこの態度は是非則つて貰ひたいと思ふ

雨山が「文学者諸君に」「是非則つて貰ひたい」と言う蒼海詩の「如何にも雄偉宏大」なる作風は、青壮年期の雨山自身においては、スケールが大きく息の長い長篇の古詩という形で受け継がれ、また、「漢魏六朝より唐時代までを根拠と」するところ、「詞藻の富贍なる」ところも、しっかりと継承されていたと言つていいだろう。

- 1 文部省・美術学校退職後の数年間については、杉村邦彦「長尾雨山とその交友 第13回」(『墨』第二二八号、一九九七年)一三九頁に考証されている。
- 2 長尾雨山『中国書画話』、筑摩書房筑摩叢書二七七、一九六五年。
- 3 呉孟晋編、平成二十七―二十九年度科学研究費助成事業 若手研究(B) 研究成果報告書(課題番号 15K16635)『長尾雨山の中国書画受容に関する基礎的研究』(独立行政法人国立文化財機構 京都国立博物館、二〇一八年三月)。
- 4 明治十四年から十六年にかけて雨山の故郷、高松で発行されていた漢詩・和歌・俳諧から成る文藝雑誌。
- 5 『古今詩文詳解』第二七集(十九年十二月五日)所収。
- 6 それぞれ『古今詩文詳解』第一九二集(十九年三月二十五日)、同第二八集(十九年十二月十五日)、同第二四三集(二十年八月二十五日)所収。「鎌倉道中」は『東京新報』二十二年一月十七日にも載る。
- 7 以上、長尾正和「岡倉天心と長尾雨山」、『岡倉天心全集』第五卷(平凡社、一九七九年)「月報」2所載。
- 8 それぞれ、『東洋学会雑誌』第三編第十号(二十二年十月二十八日)文苑、『しがらみ草紙』第五号(二十三年)所収。
- 9 いずれも『しがらみ草紙』第七号(二十三年四月二十五日)所収。
- 10 労祖徳整理『鄭孝胥日記』(中華書局一九九三年版)二五五―二五六頁。袖海は、訪中中の副島種臣と上海で知り合った後、来日して当時興亜会や東京帝大等で中国語を教えていた張滋昉(一八三九―一九〇〇)の字。水野貫龍は僧侶、著に『教林一枝』、『浄土教会衆日用行法略記』(いずれも二十三年刊)がある。西島は、名は醇、字は子粹、号は梅所、一九三五年に卒し、享年七十五歳、通儒西島蘭溪の孫で、当時海軍省に勤めていた。「无教」の「教」は「較」の意か。
- 11 原作品に番号が付されているわけではないが、一首ごとのまとまりを分かりやすくするため、番号を付けた。以下、同じ。
- 12 この句、『易』大過の象伝「枯楊生華、何可久也」に基づき、「良いことは長続きしない」の含意があるか。

13 この句、『後漢書』王渙伝に見える「枳棘非鸞鳳之所棲」という言葉を踏まえる。低い地位は立派な人物の就くべきものではないの意をたとえる。

14 本句は「千金市骨」(『戦国策』燕策一)の典故を踏まえる。

15 以上二句は「老子」第十八章の「大道廢、有仁義。智慧出、有大偽。」を逆説的に踏まえた表現か。

16 この「撫」字は、音義ともに「模」と同じで、ここでは「仿効」の意(『漢語大詞典』第六卷八七二頁)に解すべきである。

17 『鄭孝胥日記』三三三頁にも簡略な記載がある。

18 なお、雨山は結構早くから滞日中国人と交際しようとしていたようで、駐日公使館随員の孫点が二十二年に編撰した『嚶鳴館春風暈唱集』(駐日正使黎庶昌が開催した日中文人の親睦会での詩集)の「諸家評跋」の中にも雨山の評語が見られる。また、鄭孝胥が駐日公使館の神戸兼大阪正理事官として神戸に駐在していた二十七年にも、雨山は鄭を訪ねている。その一度目は二月九日で、鄭は不在だった。二度目は三月二十七日で、雨山は静齋と連れ立って訪問し、料亭でもてなされている。ちなみに、この二十七年の二月から三月にかけて、雨山は神戸もしくはその近辺に滞在していた可能性があるが、詳細は不明である。

19 『亜細亜』第二卷第六号(二十六年七月一日)掲載の「貧士歎」も詩句は同じ。

20 「調飢」は『詩経』周南「汝墳」の詩句に基づき、「最も耐え難い朝のひもじさ」の意。

21 「路」は「輅」に作るべきか。「輅」は天子の車、「軒」は大夫以上の身分の者が乗る車。

22 「蘆中」は蘆中人、すなわち窮士としての伍子胥を意味する語。なお、雨山は「蘆中亭」を書齋名の一つとした。

23 言わずもがなだが、「元亮」は陶淵明の字。

24 以下、『日本』の閲覧には、ゆまに書房の復刻版(一九八八〜一九九一年)を利用し、不鮮明な箇所については国立国会図書館東京本館所蔵のマイクロフィルムも利用したが、それでもなお判読できなかった箇所もある。判読できなかった字は「□」で示すことにする。

- 25 掲載された日は、二十七年八月十日、十一日、十二日、十三日。また、初めの六首は『支那学』第七号（二十七年十月二十一日）文苑に、後の四首は同誌第八号（同年十一月三十日）文苑にもそれぞれ掲載されているが、『日本』掲載のものとの字句の異同はない。一方、この詩は全十首が神田喜一郎編『明治漢詩文集』（筑摩書房 明治文学全集62、一九八三年）にも掲載されており、数か所の字句の異同があるが、抛ったところのテクストは不明である。
- 26 本句は『史記』孔子世家の孔子の斉国訪問の一段を踏まえる。「臠肉」は宗廟の祭りに供える焼いた肉。
- 27 「頭上巾」は陶淵明が酒を漉すのに使い、普段は頭にかぶっていたという頭巾のこと。「飲酒二十首并序」其二十に見える。
- 28 以上四句は、『史記』春申君伝を踏まえる。
- 29 趙孟榮は趙宋の宗室として、『江西通志』卷七十六等とその名が見えるが、以上二句の典故は未詳。
- 30 「固窮」は『論語』衛霊公篇の「君子固窮（下略）」という言葉に基づく。「困難な境遇に陥っても、固くその境遇を守って、安易な態度をとらない」意。
- 31 「薦瘞」は一再ならず甚大なる災禍が起こること。『詩経』小雅「節南山」の詩句に基づく。
- 32 この句の典故については注46を参照されたい。
- 33 「奏膚公」は『詩経』小雅「六月」に見え、大功を天子に奏聞するの意。『支那学』第八号は「膚公」を「膚々」に作るが、誤りだろう。本句は『詩経』小雅「白駒」の詩句「爾公爾侯、逸豫無期」に基づき、現状はこの詩句の意味と正反対であることを言おうとしている。
- 34 すなわち、あなた方を公や侯として仰ぎ従っていれば、我々民はいつまでも安楽に暮らせるだろうというのが、この二句の意味だが、兩山は（今の世の公侯は（民は放っておいて）さっさと自分たちだけ安楽に暮らしている）と言っているのである。
- 35 「補袞」は、天子の職に欠けたもののある時、仲山甫がこれを補佐したことを言う。『詩経』大雅「丞民」の詩句「衰職有闕、維仲山甫補之」に基づく。
- 36 「非茹」は『詩経』小雅「六月」の詩句に基づき、「王威を恐れはばかるところがない」の意。

- 37 以上三句は「野人献芹」の典故（『列子』楊朱篇）に基づくこと、言うまでもない。
- 38 「威風楼」は日中の文献には見慣れぬ語である。関係ないかもしれないが、朝鮮の高麗王朝の時代、開城にこの名を持つ楼閣があった。国家の慶事がある時に王が文武百官の朝賀を受けたり、科挙の殿試が行われたりした楼閣。檀国大学校附設東洋学研究所編『韓国漢字語辞典』巻一（檀国大学校出版部、一九七九年）一一四三頁の記載による。
- 39 以上二句が『孟子』尽心章句下の「鷄鳴而起、孳孳為善者、舜之徒也」云々の一節に基づくものであること、言うまでもない。
- 40 筆者の浅学の故だろうが、この句を読解できない。文脈から見れば、「期待するのは大義の実現されること」といった意味と考えられるが。
- 41 郭景純（郭璞）の誤りだろう。
- 42 「正始」は三国時代魏の年号（二四〇～二四九）で、ここでは当時の詩人、嵇康・阮籍らの詩風——「正始体」の謂いであろう。
- 43 前漢までの文と盛唐の詩だけを尊重する擬古主義を唱えた明の「後七子」のリーダー格李攀龍と王世貞のこと。
- 44 「優孟衣冠」は、『史記』滑稽伝に基づき、似て非なるもの意。
- 45 「奏爾時」は『詩経』小雅「賓之初筵」に見える語句。その解釈には諸説あるが、兩山のこの作品の文脈から見て、毛伝の系統を引き「射の多く中る者の功を奏」するの意にとる胡承珙・馬瑞辰・陳奂の説に従う。詳しくは高田眞治『詩経下』（集英社漢詩大系第二巻、一九六八年）二七五～二七六頁。
- 46 「嫠婦不恤緯」は『春秋左氏伝』昭公二十四年の「嫠不恤其緯、而憂宗周之隕」の語句に基づき、国が亡びるのを案じるの意。疑うらくは「暫」の誤りか。
- 47 以上二句は、陳・蔡の大夫が、孔子が楚に用いられるのを妨げるため、孔子とその門人を陳・蔡の野に囲み、糧食を絶った故事（『史記』孔子世家）を踏まえること、言うまでもない。「陳蔡客」は、孔子とその門人を指すことになる。
- 49 以上二句は『莊子』逍遙游篇の一節に基づくこと、言うまでもない。

- 50 以上二句は、呉を滅ぼして会稽の恥をすすいだ後は、姓名を変じて鴟夷子と名乗り、役人のかぶる冠をかぶらず髪をうっさばき、小舟に棹さして気ままに江湖に浮かんで暮らした越の范蠡の境地を詠んだ、李白「古風」其十八の末二句「何如鴟夷子、散髮棹扁舟」を下敷きにしてしているようである。
- 51 以上二句やや意味を把握しがたい。
- 52 以上二句は陶淵明「帰去來辭」の「胡為乎遑遑欲何之」の句が下敷きになっている。
- 53 筆者はこの句を読解できない。訓読も付け焼刃である。或いは「当昂然何之」（当に昂然として何くにか之くべき）の誤りか。
- 54 『孟子』萬章章句下に見える「尚友」の語に基づく表現であること、言うまでもない。
- 55 これも郭景純（郭璞）の誤りだろう。
- 56 「困」の誤りではないかと疑われる。
- 57 「字」は「子」の誤り。「文子」は中国古代の思想書。『漢書』藝文志では「道家」に著録。この引用文は、その精誠篇に見える。
- 58 周代、風俗を調査し政治の参考にするため、各地に派遣され、民間の詩歌を採集した役人―「采詩の官」のこと。
- 59 「開」の誤りか。
- 60 「忡」の誤りか。「忡怛」は憂え痛むさま。
- 61 「開諷」なら、教え導き諫める意。
- 62 『龍南会雑誌』（五高の校友会誌）第七十二号（三十二年五月三十一日）にも載るが、十数か所の字句の異同がある。また、この詩も上述の神田喜一郎編『明治漢詩文集』が掲載しており、その本文は『龍南会雑誌』所載のものの方に近いが、異なる所もあり、出所は不明である。
- 63 この句の第五字の部分は三十二年三月三十日の『日本』では判読しがたいため、『龍南会雑誌』第七十二号の本文に見える「鬢」の字を充てた。

- 64 以上二句は、西晋の荊州刺史石崇（字季倫）が巨富を得、別荘の金谷園で宴会を開くなどして、贅沢な生活をした故事（『晋書』本伝）を踏まえる。
- 65 中国古代の詩歌において、「西樓」が往々にして失意・悲哀・寂寥等の表現の舞台設定に使われること、言うまでもない。
- 66 言うまでもなく、杜甫の「觀公孫大娘弟子舞劍器行 并序」のこと。
- 67 『龍南会雜誌』第六十一号（三十年十二月七日）にも載り、三か所の字句の異同がある。
- 68 五行説において、五時（すなわち季節）の中では「秋」が、五常（五徳）の中では「義」が、それぞれ「金」に配当される。
- 69 二十八年十月二十五日の『日本』に釈愚庵の「乙未中秋、同雨山居士、游竹生島賞月」と題する詩が掲載されていること、二十九年七月十三日の同紙に雨山の「竹生島観月記」が掲載されていること、同年四月六日の同紙に雨山の「下保津川記」が掲載されていることなどから、二十八年の中秋を含む十か月間、雨山は京滋地域か、または同地域を含む一帯を旅していたことが知られる。
- 70 「長嘯」は「声を長くして詩歌を吟嘯する」意味の語である（『大漢和辞典』巻十一、六八一頁）が、ここではそれと同じように感じられる風のようなり・響きをたとえるのに用いられていると思われる。
- 71 本句は『楚辞』離騷の「夕餐秋菊之落英」の句を踏まえるか。
- 72 「觴難傾」は、酒を飲んでも一向に愉快にならないの意と解したい。
- 73 「涼風」で始まる十字は、陶淵明の五言二十句の作「辛丑歲七月赴飯還江陵夜行塗口」の第九、十句。
- 74 この二人の詩人は、あまり知られていないと思われるので、筆者の調査の結果を簡略に記しておく。松原竹秋（一八二八～一九〇二）は、名崇、字子功、讃岐の人、江戸に出て安積良斎（一七九一～一八一六）の塾に入り、都講（塾頭）になったが、一生不遇だったという。渋谷香北（一八四九～一九三三）は、名寛、高知の人、明治の初めに上京し、その後、各地の官職、学校長職を歴任した。以上、『世界之日本』第三卷（二十九年）、松原竹秋著・三谷穆編輯兼発行『竹秋遺稿』（一九三四年）、高知県人名事典編集委員会編『高知県人名事典』（高知市民図書館、一九七一年）等による。

- 75 注69を参照されたい。
- 76 近衛翠山公とは、公卿の近衛忠熙（二八〇八―一八九八）である。
- 77 「蘇山」はもちろん阿蘇山のこと。
- 78 四言詩としては、三十五年八月九日の『日本』所載の長篇「菅丞相道真公一千年祭典献詩代蘋蘩」もある。
- 79 字義どおりなら、「扶南」はかつて東南アジアに存在した国の名、「姑射」は仙人の住む山だが、「扶南姑射」は「船小屋」のもじりだということ、成田健太郎氏（京都大学准教授）のご指摘により知った。
- 80 黒木欽堂は、言うまでもなく、雨山の同郷の親友、黒木安雄（一八六六―一九三三）。
- 81 「杜」は杜甫を指すに違いあるまい。王」は誰を指すのか不明だが、或いは王維か。
- 82 沉文愨は沈德潜（一六七三―一七六九）のこと。「文愨」はその諡。
- 83 「熊魚両獲」は、『孟子』告子章句上の一節に基づき、併せて得ることの困難なものを併せ持っている意。
- 84 富岡敬明が熊本県令を務めていた時に始めた吟社、閩餘会の会員たちである。
- 85 これは並べて掲載されている黒木欽堂の「偶作五言寄雨山星江両学友在隈城」に和した作品。「星江」は五高の同僚教師、児島猷吉郎の号。「隈城」は熊本のこと。
- 86 これは熊本の高から鹿兒島の七高に転勤することになった山田濟斎を送別する作品。転勤先が鹿兒島であることから、西郷隆盛に代表されるような薩摩の壮士をイメージし、そのような壮士を育成してほしいと結ぶ作品で、濟斎（備中の出身）が「薩州壮士」であるわけではない。
- 87 「星集」は漢詩結社「星社」の例会。
- 88 柳井録太郎編『征清詩集』（博文館、二十八年六月二十九日）、及び野口一太郎編『大蘇餘光』（新進堂、二十八年七月十四日）にも載っている。

- 89 雨山の親族・師友、その他関係する郷里の人物については、太田剛氏の「讃岐における長尾雨山の交友と書碑」〔『書論』第四十五号、二〇一九年〕に整理して簡潔に紹介されている。
- 90 なお、この作品を三浦叶はその『明治漢文学史』（汲古書院、一九九八年）中篇第二章「日清戦争と漢詩」の中で、込められた気概・音調の両面からこの作品を絶賛する本田種竹の評と併せて紹介し、「この上に吾人の評を加える必要はあるまい」と絶賛している。
- 91 日清戦争の際、多くの漢詩人が戦意高揚のための作品を詠んだが、そのような中で雨山にはこのような作品があまり多くないように思われる。最近、日清戦争の当時、日本人が詠んだ漢詩を別集・専集（『明治漢詩』、『大森餘光』など）・新聞雑誌から収録した查屏珠編著『甲午日本漢詩選録』（鳳凰出版社、二〇一七年）という一二七二頁にも上る書物が出版されたが、これに収録されている雨山の作品は上述の「従軍行送六谷祇役朝鮮」（『大森餘光』から収録）だけである。なお、日清戦争漢詩に関しては筆者に「漢文と日本人―日清戦争漢詩をめぐって」（『武庫川女子大学言語文化研究所年報』第二十九号、二〇一九年）と題する拙文がある。
- 92 『龍南会雑誌』第六十一号（三十年十二月七日）にも載る。
- 93 なお、「舟遊賦」の序には「癸巳之秋、泛舟遊墨江、思東坡赤壁遊也」と述べられており、雨山の中国からの帰国後、京都在住時の寿蘇会・赤壁会開催等で顕著に表れる蘇東坡尊崇・追慕の念の下地をなすものと言えるだろう。
- 94 故大作延寿郎『続蘭城遺稿』（斎藤坦蔵、三十二年一月十日）にも載る。なお、この作品は杉村邦彦「長尾雨山とその交友 第8回」〔『墨』一二三三号、一九九六年〕に、書き下し文を付して紹介されている。
- 95 杉村邦彦「長尾雨山とその交友 第9回」〔『墨』第一二四号、一九九七年〕一二五頁。
- 96 札之（長尾正和）「長尾雨山」（『冊府』第十号、一九五九年）。
- 97 札之（長尾正和）「長尾雨山―承前」（『冊府』第十一号、一九五九年）。なお、上述の「消遣十首」中の「一人社稷を憂うる」元老は蒼海のことかと、筆者には思われてならない。
- 98 原載辻桜一「明治詩壇展望」（『漢学会雑誌』昭和十三年十二月、同十四年四月）。前掲神田喜一郎編『明治漢詩文集』所収、

三六五、三六七頁。なお、辻はこの文章の中で、蒼海の漢魏高唱に和した者として、「国分青厓・桂湖村・石田東陵の三家」を挙げている。

副島直正編、武井義等校『蒼海全集』巻五（副島直正、一九一七年）。なお、『蒼海全集』巻五では、さらに一首付け加わっている。

『大阪毎日新聞』大正七年二月二十五日。『詩林』第三集（同年四月一日）にも「輓近漢詩壇」という題で掲載。

101 「専門詩人」として雨山が挙げているのは、大沼枕山、小野湖山、森春壽、森槐南、橋本蓉塘、永坂石埭、国分青厓、本田種竹、木蘇岐山、高野竹隠らである。

102 副島が『論語』のこの言葉をどのように解していたかは不明。参考までに、吉川幸次郎の古注、新注の解釈を敷衍した言葉を引いておく。古注の敷衍…「辞氣」とは、言語およびそれに伴う雰囲気を用いようであり、「辞氣を出だす」とは、言葉づかいということであるが、それも礼のおきてによるならば、鄙^いしい、道理に倍^{そむ}いた、他人の言語を、遠ざけることができる。新注の敷衍…言葉づかいに気をつければ、自己の言語が凡陋背理から遠ざかる。吉川幸次郎『論語 上』（朝日新聞社新訂中国古典選第二巻、一九六五年）二四一～二四二頁。

（しばた・きよつぐ 本学名誉教授）